

山と博物館

第17巻

第9号

1972年9月25日

大町山岳博物館



屏風の頭より瀧沢カールを望む

撮影 堀 勝彦

本紙二〇〇号に想う

昭和三十一年二月に本紙「山と博物館」が創刊されてから、すでに十六年七カ月の才月が流れ、本紙は今号をもって通算二〇〇号を数える。この間、臨時増刊二回、二号合併発行一回、休刊二回があった以外は、毎月一回の発行が確実に続けられてきた。

本紙「山と博物館」は、ほんとにささやかな普及紙である。マス・メディアというにはあまりにも小さい。むしろミニ・コミの類であろう。このミニ・コミが本館の唯一の普及紙であり、機関紙である。

地方博物館にとつては、ささやかな普及紙であつても、毎月発行するということは、そう容易なことではない。大町市が、地方財政再建特別措置法の準適用に踏み切った昭和三十五年から数年間の逼迫した財政事情の中で、本紙「山と博物館」も二回の休刊を余儀なくされたのだつた。

市町村立の博物館は、設置者である地方自治体の財力に依存している。しかも、任意設置であるから、自治体の財政事情が悪化すると、国の手当てがないのを理由に、お荷物として切り捨てられる危険すらある。ささやかな普及紙の継続も容易でないというのは、そのためである。

GNPがあつても、大方の自治体はいわゆる三割自治にあえいでおり、地方博物館の前途は依然としてけわしい。

ともあれ、大町山岳博物館は二十才の年を迎え、本紙「山と博物館」も十六年余の命脈を保つてきた。その歩みの中で、何と多くの執筆者の支援と愛読者の好意を得て来たことか。

本紙を支え続けてきてくれたもの、そして今後も支え続けてゆくであろうもの、それはふる里の自然を、日本の山河を、私たちの生存の母胎として、また、尽きることない文化の泉として永劫に美しく保ちたいという広汎な人々の願いであろう。

(海川庄一)

登山道の昆虫(2)

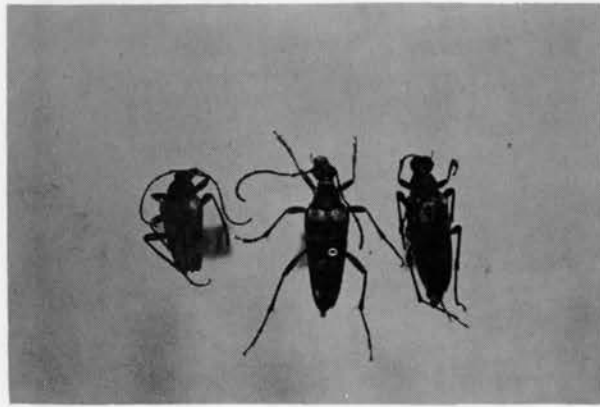
輿水太仲

◎ジヨウカイボン

ツチハンミヨウと同じく甲虫の仲間では体が軟弱で姿を現わすのも一般に早い。四、五月頃から山地の花や葉上において、静止することなく活動する。日本には、大型のキンイロジヨウカイやアオジヨウカイ、小型のツマキクロコバネジヨウカイまで十数種のもの知られているが、アルプス山系にはそのほとんどが見られる。一番普通なジヨウカイは平地で夜間電燈の光に集まって来る。これは蜂とまちがえられ、知られざるが故につまみ殺されたりきらわれたりすることを間々見受けるが、一二〇倍も登ればクロジヨウカイやアオジヨウカイ等高地性のものが多くな



クロジヨウカイの共食い



右 アカハナカミキリ 中:ヨスジハナカミキリ 左:トホシハナカミキリ

る。何れも体が軟弱なのに、食性はどう猛性を帯び、手当り次第に生きた昆虫をつかまえて食う。時には仲間同志決闘の末、弱い奴が食われてしまうこともあたりまえにおこなわれる。しかし、このどう猛極まりない虫にもまた大敵があり、ムシヒキアブというアブの一種は時折このジヨウカイをひとつとらえて食っているのを見る。

◎花に集まるカミキリムシ

自然はこの美しい花上に、緑したたる新緑の葉陰に、日夜行われる小さな虫達の命をかけた決闘を認め、生物生存の法則をじっと見守っているのである。

帯も様々な花でにぎわうが、中でもシシウド、バイケイソウ、コデマリ、ウツギなどは花に集まる昆虫の集会場の様になる。ことに谷合の日当りのよい、風の少ない所に咲いたこれ等の花上にはずい分多くの昆虫が集まるが、きまつて多いのはカミキリムシの類であろう。

日本産のカミキリは四四〇余種で、これが六群にわかれる甲虫類では大世帯のグループであるが、このうちハナカミキリやビドニヤと言われるものが花上で目立つ。

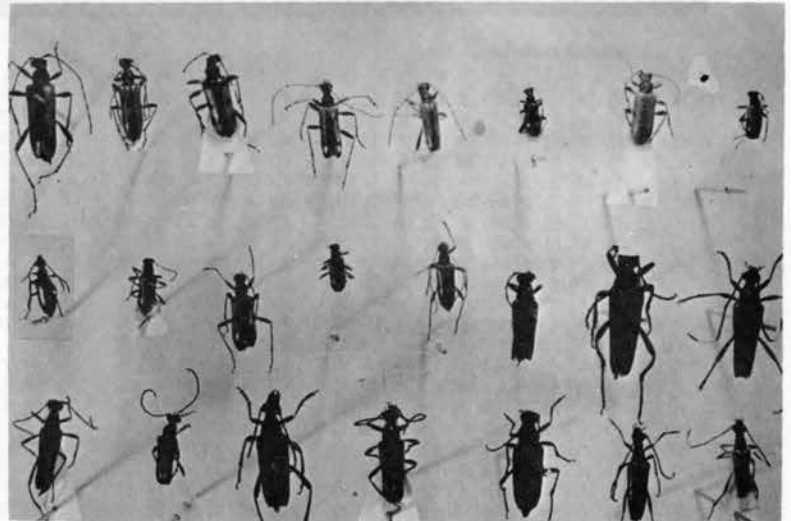
黄色と黒のハデな縞模様様の蜂のような奴が大いにはヨスジハナカミキリで、ずっと細型の少々か弱い感じなのがホソハナカミキリ、体長五割一部位の小型で薄茶色に黒の点のある地味な色で、胸が丸型なのが、ビドニヤと言われるカミキリ。

金緑色か赤銅色の宝石のようなのがアオハムシダマシとアカガネハムシダマシで、これはカミキリムシのようだが全く別の種類である。

ずっと高さを増して、二四〇〇〜二五〇〇以上の高山帯では、花に集まるカミキリも少なくなり、北方系のトホシハナカミキリが見られる。これはアルプス高山帯に棲むカミキリの代表種の一つである。一般にカミキリムシの幼虫は朽木の中にトンネルを穿って親になるまでその中で生活するが、この幼虫を探し当てて口にほうり込む——「噛み」とプツとつぶれて流れ出す汁の舌ざわりは何にも勝る味わいとか?食通は言っている。

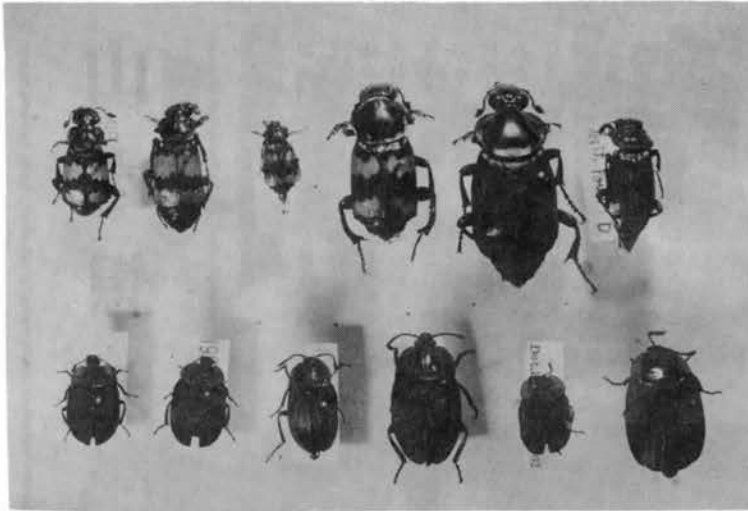
◎シテムシとオサムシ

埋葬虫——シテムシ——誰の命名かは知らないが、この虫の習性を如実に表現する名である。

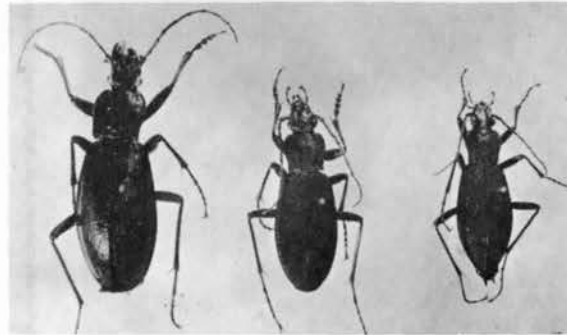


カミキリムシのいろいろ 上段と中段左より5番までビドニヤ下段右より2番までホソハナカミキリ

山間をはい廻って動物の死骸を探し、それらに集まり、それが乾固するか、骨になつてしまふ迄むさばり食う。シテムシの他にこうした腐臭を放つものに好んで集まるものに、ハネカクシ、エンマムシ等の甲虫もいる。だからキャンプ後の魚肉の籠、人獣糞などおよそ人には無用の廃物も、これらの虫達には命を支える貴重食糧である。シテムシは日本に現在、三十数種が知られているが、アルプス山系ではその約半数が棲む。体の型からこれらを大別すると、亀の様なかっこうをし、平べつたいものをヒラタシテムシといひ、全体に黒く背に黄赤色の紋を散りばめたものをモンシテムシ、紋のないただ黒一色のものをクロシテムシという。その他にまだあるが、海拔



上：モンシデとクロシデムシ(左2匹) 下：ヒラタシデムシのいろいろ



右：オンタケクロナガオサムシ 中：クロナガオサムシ(高山性)
左：クロナガオサムシ(低地性)

シ等のように翅を持たないものもあるが、多くは翅を持つている。親になるまでに半変態をし成虫になる。大部分が植物の新し枝等に細長い口を突き刺して汁を吸い栄養をとっている。また中には他の昆虫の体液を吸いとする食生活をするものもある。昆虫仲間のギャングとも言われている。半翅目とは一見翅が半分しかないようなかっこうからつけられた名であり、カメムシとは亀に似ていることから来た名である。大てい西洋でその昔、戦具として使われた桶に似て、中でもツノカメムシの仲間には両肩にいかめしい角を持っているのは面白い。陸棲のものの中には、つかまえると独特の悪臭(カメムシ酸)を放つもの——アオクサカメムシなど——がある。一般にその臭から別名を承っている。それは木曾地方で、ヘルクサムシ、ヘクサムシ、北アルプス地方では、ヘッコキムシ、中・南アルプス地

方では、ヘツピリムシ、ヘヒリムシ、ヘツサムシ、クサムシ、ヘクサムシ、ヘクソムシ、ヘツブリムシ、高山地方でヘクサイボ等々である。それにしてもなかなか美しい色彩を持つアカスジキンカメムシ、ツノアオカメムシ、ジユウジナガカメムシなどもいる。オオキンカメムシも美しいものであり、これは主に日本の京阪地方から南台湾あたりまでに分布する南方系の種類であるが、北アルプスの白馬岳の雪渓上や中の湯で、夏期時々拾われたことがあるが、その理由はわからない珍現象である。

アルプス山系では、ハギ、クス等の植物にヒメマルカメムシと言う小型のもの、フジの木にアカスジキンカメムシと言う赤と黒の縞入りの美しいもの、タマカメムシと言われる珍種、プチヒゲカメムシという小型の地味な高山性のもので暗緑色のスコットカメムシやアカシカメムシ、三千米に近い高所にごく稀に見られるトゲツノカメムシ等々日本産カメムシの過半数が棲む。

(次号へ続く)

一三〇〇以上のところでは、モンシデとヒラタシデムシの仲間が一番多い。中でもツノクロシデムシは高山に棲むこれらのシデムシ類の五〇%を占める程に多くの個体が分布し生棲している。

オサムシ類もシデムシと同じ食生活をする虫である。この虫の研究は甲虫では比較的古代から行われており、現在では数多くの種類に分けられ、特に地方によっていろいろの変化ある型や色彩を示すことが知られている。このことは、オサムシの多くが地表生活をし後翅が縮小したり退化してなくなってしまうたりしたため、遠くまで移動することが出来なくなってしまう、そのためその地方独特の型や色を持つようになったと考えられ、遠くこの虫の発生から今日までの歴史を物語るものであり、はては、日本の国の生い立ちや地

球の歴史をも物語るものと、学者や研究者が興味を寄せている虫でもある。

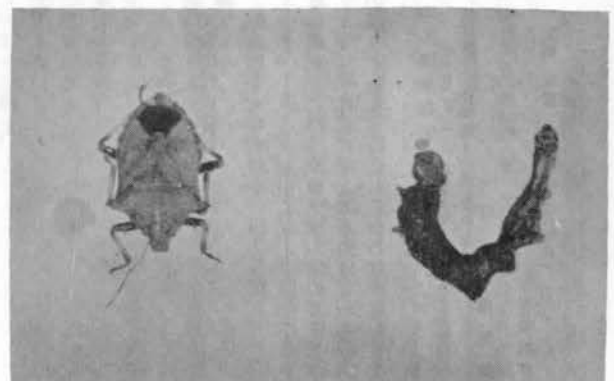
アルプス山系の高所ではクロナガオサムシというのが多くいる。これは平地にもいる種類だがずっと小型になったものが多い。オンタケクロナガオサムシというのは、北アルプス南端、木曾御岳山(三〇六三)で最初に発見され命名されたものであるが、二〇〇〇三〇〇以上の高山特有のオサムシで、平地では見られず、高地でも比較的数の少ないものである。なおオサムシは多く昼間は石の下、朽木などにかくれており夜間に餌を求め行動するので、昼間登山道などで会うことは極めてまれである。

◎カメムシ

水たまりで見るアメンボ、水中で卵を負って生活するコオイムシ、カマキリに似たミズカマキリ、などは水棲のカメムシ類であるが、多くは陸にすみ、昆虫仲間では半翅目と呼ばれるグループに属している。体の型は、細長いもの丸いものなど様々である。アブラムシ(ゴキブリではない)カイガラムシ



オオヘリカメムシの文尾(日本のカメムシの中で一番大型)



肉食性のクチフトカメムシ 左はその餌になったクモツマキチヨウの幼虫

山を想えば

百瀬慎太郎・平林武夫両大人の霊に献げる

清水悟郎

厳しくも美しい掟のように、

山に行く、

誰も同じ一すじの道を登り、降り、

そこでばったり古い仲間に出合いもすれば、

道をゆづりあい、あいさつを交わす、

それだけで新しい友だちがでてもする。

後になり、先になり、どこかでまたいっしょになりながら、

みんな同じ道を、

初めからいっしょだったように黙々と歩いて行く。

ああ、虚空高く鎮まりながら、

はるかに人の子を手招く山よ、

無言のことばも、

永遠を語り、神秘を示し、

山頂のほしいままなる展望と嬉しき共感に、

宿縁のように誰れをも他人でなくしてしまう山よ。

まこと、

山を想えば人恋し、

人を想えば山恋し、

これぞ世に在りしかの日々

大沢の小屋の門べに、針ノ木の峠のコルに、

爺、鹿島、針ノ木、蓮華、

遠くは水島、赤中、槍、穂高、また劔、

連なる山脈を仰ぎつつ、

消え行く残雪の日々を人待ち顔に佇んで、

さてはまた雑沓の巷に独りいて、

慎太郎大人が胸中に湧きし思いよ。

君が面影偲ぶ碑銘とともに、

いつよりか山恋うる男、女の心に深く刻まれて、

今は早、山行を驚う者のうれしき合言葉とはなつた。

さるにても、

この語、この想い、とこしえに消えずあれとこそ、

いち早く碑にと刻み、

名にし負う針ノ木大雪溪の一副、

こそぞ餘の何人にも増して、

慎太郎大人の足跡あまねく印されし所、

げにここ良しとこの地を卜し、

その霊祭りつづけし武夫大人、

魂きはる人の命の、これも定めか、

なほ壮りなる齢を残し、

今日よりぞ、相共に祭らるる身とはなりしよ。

さはれ、少年の日よりして、

不断の雲吐く山脈を明け暮れに仰ぎつつ、

楽しからずや山河の、

清きを己が心にて……

校歌高らかに歌いては人と成りし大人らよ、

あまた年壮りなりしかの日々、

駒草、み山うす雪、岩に咲く花々を共に愛でし大人らよ、

榎火囲んで酒酌み交わしたる大人らよ、

衣笠草、白根あおいすでに花開く今日、

山恋うる古き、新らしき友らに囲まれて

相共に祭らるるとは……

その一すじにして、美しくも清らかなる生涯は、

咲きつぐ高嶺の花の如、

消えざる雪溪の雪の如、

終に不滅なるを思うのだ。

われらまた大人らと深く宿縁の一人また一人、

おのがじし山をば魂の故里として憧るるもの、

見そなわせや、

山を想えば人恋し、

人を想えば山恋し、とてここに集い、

高らかに雪山讃歌を合唱するを……

ああ、信濃大町、岳の町、

み空十里、輝く残雪の山肌に眼奪われつつ、

この日、朝まだき駅頭に下り立てば、

思いは遠く、かのシャモニーの駅近く、

王者モン・ブランを仰いで立つソシユールの銅像にも似て、

いずこにか大人らがピッケル握つて立つ姿を幻に見、

今また針ノ木の大雪溪を歩一歩と踏みしめれば、

在りし日の大人らが深き足跡を、

正に現つに踏んで登る思いだ。

ああ、無常の世、転変の日々、

誰れか永遠の山を慕わざる、

誰れか同行の友を思わざる。

第十五回 慎太郎祭 記念山行当日針ノ木大雪溪上にて

平林武夫先生追悼

昭和四十七年六月十一日(日曜日)

大沢の小屋の窓辺に爺の顔の
杖はむ色と見つつ、幾日ぞ
慎太郎

大沢小屋前碑文より

訂正本紙前号二ページ最下段「山のガイドたち」文中、一九二六年とあるのは、一九〇六年の誤りでした。訂正しておわびいたします

山と博物館 第17巻 第9号

発行所 長野県大町市TEL0261-211

印刷所 大町市下仲町 大糸タイムス印刷部

定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号(長野)二二、二九三